

近代作家研究叢書75

監修／吉田精一

白秋研究

白秋とその周辺

木俣 修著

解説／横尾文子

日本図書センター

白 秋 研 究 Ⅱ 白秋とその周辺

著者略歴

1906年滋賀県に生る。歌人。昭和女子大学教授、
短歌雑誌『形成』主宰。主要著作・歌集『高志』
『冬暦』『木俣修歌集』研究評論集『北原白秋』
『近代短歌』『近代秀歌』『評釈小倉百人一首』
等

昭和30年4月1日 第1刷発行 ￥230

著 者 ^き木 ^{また}俣 ^{おさむ}修

発 行 者 小 山 芳

印 刷 所 ム ラ マ ツ 印 刷 所

東京都新宿区四谷二ノ四

発 行 所 新 典 書 房

東京都新宿区舟町七番地
振替東京一五九五八番

落丁乱丁本は本社にてお取替いたします

白秋研究Ⅱ〔白秋とその周辺〕目次

はしがき

I

與謝野晶子と白秋	一
若山牧水と白秋	三
斎藤茂吉と白秋	三
島木赤彦と白秋	五
中村憲吉と白秋	七
古泉千樫と白秋	八
萩原朔太郎と白秋	二〇
白秋に宛てた葉書	二五

山本 鼎 鈴木三重吉 木下李太郎 岡本かの子

山村暮鳥 森 鷗外 上田 敏 大手拓次
 平出 修 島崎藤村 坪内逍遙 與謝野 寛

Ⅱ

白秋と俳諧……………一六

白秋の俳句……………一五

白秋の歌集……………一三

白秋の詩文と隨筆……………一六

『多磨』創刊前後……………一五

Ⅲ

白秋とともに……………一八

白秋の生れた家……………一四

古問屋のトンカジョン……………二一

三崎の白秋……………二三

『桐の花』秘話……………三七

白秋詩碑ノ一ト	二四五
白秋先生の思い出	二五三

IV

白秋襍志	二六八
白秋会『白秋全集』刊行祝賀会	二八五
白秋展覽会	二九一
白秋先生葬送記	二九七
追悼記 その一	三〇三
追悼記 その二	三〇七
追悼記 その三	三一三
追悼記 その四	三一七

V

芥川龍之介と白秋	三〇八
石川啄木と白秋	三一五
木下利玄と白秋	三二〇
三上於菟吉と白秋	三二三

I

晶子と白秋

——白秋に宛てた與謝野晶子の手紙——

北原白秋が新詩社に入つたのは明治三十九年、その二十二歳の時であつた。それ以前、すでに『文庫』派の詩人として多くの秀れた詩を『文庫』その他に發表していた彼は与謝野寛の度々の慫慂によつてこの挙に出でたわけである。入社直ちに『思ひ出』の詩の十数篇が『明星』に紹介された。彼は『明星』派の俊秀詩人としての新しい出發をしたのである。いうまでもなく、ここで彼は寛の夫人であり『明星』の最も華やかなそして秀れた作家である晶子と相識することになつた。こうして白秋は吉井勇・木下杢太郎・石川啄木・長田秀雄・平野万里・高村光太郎・茅野蕭々等と共にその才華を末期の『明星』の誌上においてかがやかせたのであるが、四十一年春、杢太郎・秀雄・勇等と共に連袂退社を決定した。〔『明星』もこの年の十一月、百号を以て廃刊。〕その理由は寛の人格に対する不信が主因となつてゐるもののごとくであるが、いまここでそれを論評する余裕はない。

新詩社を脱退して以後の寛・晶子对白秋の文学的な交渉や人間的な關係はどのようになつてゐたかといふことは、興味のあることであるが寛・晶子も白秋もそのことについては深く立ち入つ

て語ろうとはしなかった。(只、寛が死去した時に白秋はその追悼の一文を綴つて、寛と相わたるところを述べている。(『白秋歌話』所収「興野」
「寛先生」「悲しみの時像」))
私は白秋歿後、彼に宛てられた書簡を整理した時、寛及び晶子の書簡を多く発見した。それらは主として白秋研究の資料として保管していたが、今機会を得て、それらの中、晶子のものの一部をここに発表することにした。年代を明治末期から大正初期のものだけに限つたのであるが、この書簡にあらわれている限りにおいては、文学上の交渉というよりもむしろ人間的な交流が主になつてゐる。いわばこれによつて晶子と白秋の人間的な交渉史のひとこまがはつきりと捉み得ると思う。同時に晶子が白秋にうつたえたうつつたえによつて晶子の生活や心境の一部が知られ、白秋をおもうところづくしによつて、白秋の生活や心境の一部が理解出来るものと考える。出来るだけ詳細な註を加え読者にも読み親しまれるように編んで見た。

一

明治四十二年十二月(推定)

白秋と晶子

御かへり遊ばせしよし御文あり難ううれしくおもひ申候さてもそのゝちの御ありさまをことなげなりとことなげにきゝ居り候その下にさま／＼の流れはあり候を人の世はかゝるものとおもひ申候例もかゝるさまに御大人らしくなり給ひしなどよくきゝ申候大人か小兒か何かはしらずわれや君や□□□□□□□□おふけなりともしら玉のごときものとおもひ申候されど君はすでにす

でにグザにてはおはすまじく候^(不明)□□れするグザはいまだ君の悲しきは知りえまじく候さればこれにもまさるいかばかりのものかなとおもひ上げ存候ふかくふかくすゐして存候弟御様の御いたつきをまことに悲しく承りながらそのうち／＼とおもひてえうかゞはず候すこしは御よろしく候や私も心経^(マ)こうしんより心ぞうあしくなり脳もあしくなり毎日／＼くるしくおもひ申候されどこれは鉄雄様よりあなた様にちかき病に候べく候末にうまれ候ひし麟と申候をいだきながらのことゝて思ふこと得かきあへず候へば筆とめ申候寛は十日より紀州へ□□□□江南様そのほどとまりにきて下され候ことに候弟様には申に及ばずばあやさんにもよろしくねがひ候先はあら／＼ 晶子

白 秋 様

うま人のためには十年のなじみの妻とおもひ候へば自らやいばあてがたく候まして子らは百二十^(不明)□□□□まで生くるとかの□□□□を飲みくれなど申候かゝる文は御さきすて下されたく候

〔註〕 ○この手紙は封皮もなく、本文に日附もないもの。巻紙に流し書きされていて判読しがたい箇所もある。それに腐蝕しているので文字が消えている部分もある。それらは止むなく(不明)と傍書、大体推定される文字数は□印によつて示しておいた。(以下これに倣ふ。)晶子の三男麟が生れたのは明治四十二年であるということと「御かへり遊ばせしよし」とある文面を白秋が明治四十二年十二月、実家の財的破綻に際しての帰省から再び出京した事実を指したものであると解することによつて明治四十二年末の手紙と推定した。この年は晶子は三十二歳、『スバル』が創刊された年である。白秋は、二十五歳、詩集『邪宗門』を世に問い、『屋上庭園』を発刊した年である。かのパンの会が発刊した年でもある。○現在探し出し得た

晶子の白秋宛ての書簡中では一番古いものである。

二

明治四十四年九月（推定）

麴町区中六番町三より麴町区飯田河岸二八金原屋へ

啓上

この間はお手紙下されありがたく存じ候また芝居にてお目にかゝりこのことゝぞんじ申候御病
気のほどつねに存じながらえうかがはず候ひしことなどもそのせつ御わび申上ぐべく候ざぼんと
（さう覚えて居り候へば）云ふものは吉井様よりうかゞひ御ゆかしく存じ居りしに候はな
はだよろしからぬものばかりにて申わけなく候へどよろしくねがひ上げ候かしこ廿五日 晶子

白秋様

そのうち静かなり候へばきずのかほどまでならぬをさし上げたくとたのみ候もはかなく候へ
ど

〔註〕 ○この手紙にも封皮がないので差出し年月は内容から考えて推定したものである。こ
の年晶子は歌集『春泥集』を出版し、『新訳源氏物語』の執筆に取りかかっている。そして十
月には夫寛を歐洲に見送った。白秋は出世作詩集『思ひ出』を上刊して芸宛の寵児となつた。
○「御病気のほど」とあるのは七月、筋肉炎を患つたことを指すのであろうか。彼は手術のた
めに岩佐病院に入院している。○白秋の木挽町から飯田河岸に移つたのは九月、ここで雑誌

『朱^{ジュ}燦^{セン}』を企劃し、十一月に創刊した。「ざぼんと云ふもの」とあるのは、この『朱燦』のことではないかと思われる。○「吉井様」とは勇のこと、○「よろしからぬもの」というのは『朱燦』への寄稿についての言葉であろうと思われる。『朱燦』創刊号には晶子の「ただごと」と題する歌十九首が載っている。例えば

何となくよりどころなく思ふ日の三日四日ありて衰へしなる

秋の夜の灯かげに一人もの縫へば小き虫のこちこそすれ

芝居よりかへれば君が文つきぬわが世もたのしかくの如くば

などという風なものである。

三

明治四十四年十一月十七日

麹町区中六番町三より麹町区飯田河岸二八金原屋へ

海こえんいざや心にあらぬ日をおくらぬ人とわれならんため

かゝること云ふ人もかたときのうちに涙をこぼすものに候給はりし御はがきのうつくしに
けふはめいりし心をすこしとりなほし候

よきうたはともむつかしく候へどありのすさびのにくがらるゝにてもさし出し申すべく候御
目にかゝるせつこの頃は如来様と内儀のやうにておはなしの少くなり候ひしなど思ふことの候こ
の間の御礼も申しおくれ候御ゆるし被下度候かしこ

〔註〕

○「海こえん」の歌は夫を歐洲に送つた晶子の胸のおもいを伝えたものであろう。○晶子は『朱欒』十二月号には寄稿はないが、明けて明治四十五年新年号には「わがおもひ」十九首を寄せている。夫を恋いおもう歌で、例えば

唯一目君見むことをいのちにて日の行くことを急ぐなりけり

一人こふならはぬこち今日になりするが悲しさかぎり知られず

筆とれば君おもふこと書きちらす人の賞めざる事をするしる

われながらあなづらはしく思ふかな巴里の大路を君一人行く

という風なものである。

四

明治四十四年十一月十八日

麹町区中六番町三より麹町区飯田河岸二八金原屋へ

へびはあたしにもかけ候

正月号のしめきりはいつに候やらむあまりはやく承りおかば却つてわすれ申すべくよきころにまたお心づけ被下度、昨日上海へ電信にて歌おくらむといたし候ひしが使の人あまり高価なりとて用事のみうちてかへり申候ひしかしこ

〔註〕

○白秋はその頃よく人に送る通信に絵を書いた。いやそれは白秋ばかりではなく新詩社系の詩人は木下杢太郎でも高村光太郎でもみなそうであつた。白秋が蛇の絵を書いて送つた

のに対して「へびはわたしにもかけ候」といつたのである。この葉書の上三分の一位に一尾のへびが描かれている。○「上海へ」云々はまだ寛が上海に居たことを示している。

五

明治四十五年一、二月の頃（推定）

麴町区中六番町三より浅草区聖天横町二一へ

この度の二行はとりけし給はらぬや逢ひまさぬ／＼とかき始めしことに候

おゆるしうれしくは候へどかのおもひとゞまり候。自らさばかりのあたひなしと知りしに候。^{（不明）}□□□の君の目にふれぬものならばさもあらばあれに候へど。ふたつにいたすべく候。

さんばうの御散文拝見いたしたく候。

こはかのうたのあまりつたなきものなりしまゝ今までえ申いでざりしことに候。

おついでに東雲堂へおたのみ被下度候。

御朝夕がうらやましく候。かしこ。十二日こたつにて。

晶子

白秋様

【註】○封皮がないので差出年月不明であるが推定で今仮りにここに入れておく。書かれている内容も不詳のことが多い。

六

明治四十五年三月二十三日

麴町区中六番町三より浅草区聖天横町二へ

啓上

久しく／＼何も承らず候ひし私の方は□□^(不考)被下度候音づれきかせ給はざりしことだけをうら
ませていたゞきたく候先月は原稿をしめきを忘れさし上げず候ひしやはり私の方が罪がおほく
候かな母君妹君に変わりもあらせられず候や御住居氣に入りてくらし給ふや吉井様に昨日御目にか
ゝり候ひし昔のさびしき人にかへり給ひしかなしきよりも多くうれしくおもひ候ひし木蓮が千
ほども花をつけ申候憎からぬこゝちのいたじ候かしこ。

三月廿三日

晶子

白秋様

〔註〕○白秋は一月母及妹家子が上京したので共に浅草聖天町に住むことになった。これは
それに触れている。○吉井勇は当時父の家を出て放浪生活をしていた。

七

明治四十五年四月二十九日

麴町区中六番町三より浅草区聖天横町二へ

いよ／＼五月五日の夕刻の汽車で新橋から立たうと存じます。

あちらへまゐりましてからの消息は昂や東京朝日には書きます筈で御座いますけれども何分に

も短い月日の間に出来ますかぎりさまざまの物を見てまゐりたいと存じて居りますので、あるひは一一の事をお便り致しかねますやうなことも御座いませうけれども悪しからず思しめし願ひます。

人のうはさになどと云ひたまひ私のまたかゝるものをさし出し候よ

かゝる中に候へどいかにもして歌さし出さむとおもふ哀れなる心のあり候へど今はまこと（以下不明）

〔註〕○「悪しからず思しめし願ひます。」までは印刷文。以下は印刷文字の上にペン書きしたもの。○晶子はこの五月までに『朱櫻』に二回寄稿している。

障子あけ覗く人なしあなわびしうたたねなれど歌をうたへど

さうび油もすみれ油も君行きて香のさびしくもなりぬ櫛箱

来よと云ひ行くべしと書きこの日より初めて夜の去りしこちす

子らおきてかへり見がちに君を追ひ海こゆる日もさはれとく来よ（二月号）

などという歌を見れば夫の後を追おうとしている気持がよく出ている。○巴里の寛から白秋に寄せたこの年の二月四日附の手紙がある。この晶子の手紙に閑聯をもつわけではないが、ここにその一節をひいて、在巴里の寛の生活の一面を紹介しておく。「——巴里へ来て見て叙情詩もまた他の文学に劣らず旺盛なのを見て小生も矢張詩をつづけたしと今更のごとくに心躍り候。詩人の群にもまじりて杯をとり候こと殆ど毎夜ながらまだ親しくする処に到らず、会話が拙いために候。若い詩人も壯老時期に入れる詩人も一つに成つて真面目に而して快活に騒いで

晶子と白秋

ゐるのが側目にも愉快を感じます。つまり芸術が巴里人の生活の日常趣味に深く編み込まれてゐる所から何の遠慮もなくのび／＼と各種の芸術が発達して行くものと頷かれます。吉井君は相変らず元氣と存じます。太田君にも御無沙汰して居ります。諸君へよろしく御序にお伝へ下さい。小生は明日から九里四郎君と一緒に一寸近郊を泊り掛けて遊び廻ります。氣に入つたら謝肉祭までは旅をつゞける積です。九里は谷崎君の小説ばかり愛読し、又巴里の夜景ばかりを絵にしてゐる男です」○『朱欒』五月号の「余録」(後記)に白秋はこう書いている。「晶子さんのお話には巴里の女はみな与謝野氏を美しい高尚な日本人と呼んでゐるさうな。私はまた五月の五日にうらわかつてはでやかな日本夫人の一人を新橋までお送りせねばならぬ。」

八

明治四十五年五月三日

啓上

シベリヤより浅草区聖天横町二一へ

汽車のゆれ候へば字もまんぞくにかけ申さずもうお宅がへをされしことゝおもひ申候けふは東京を立ちしより九日目に候シベリヤはおもひしにことなりよきところに候さいへどまだ湖も川も半は氷り居り候雪がふることもあり候雨は二日ほどに候ひし斎藤さんと云ふ人が一人伴れになりくれ候この人ともモスコウにて別れ申すべく候平野さんに顔ももの云ひもよく似し人に候白樺の林を昨日よりつゞきて汽車の走り居り候紫の花きなる花白き鈴らなど多く候牛や馬が人のやう